LIGHT HOUSE
ライトハウス
〒152-0035 東京都目黒区自由が丘 1-16-13
TEL 03-3717-2711　FAX 03-3717-2721
http://www.lighthouse-jiyugaoka.jp　e-mail gospel@lighthouse-jiyugaoka.jp
郵便振替口座　00120-6-170857　みずほ銀行 渋谷支店 普通 2382850（ライトハウス）

CFI ニュースレター C2023-09 「神の愛の約束」

[今月の聖書]

「山は移り、丘は動いても、我がいつくしみは、あなたから移ることなく、平安を与える我が契約は動くことがない」とあなたをあわれまれる主は言われる。(イザヤ 54：１０)

「まことに彼は、我々の病を負い、我々の悲しみをになった。しかるに我々は思った、彼は打たれ、神に叩かれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は我々のとがのために傷つけられ、我々の不義のために砕かれたのだ。彼は自ら懲らしめを受けて、我々に平安を与え、その打たれた傷によって我々は癒されたのだ。」(イザヤ 53：4.5)

「我々は皆羊のように迷って、おのおの自分の道に向かっていった。主は我々すべての者の不義を、彼の上に置かれた。」(イザヤ 53: 6)

「あなた方は、羊のようにさまよっていたが、今は魂の牧者であり、監督である方のもとに、たち帰ったのである」。(第一ペテロ 2: 25)

「キリストも、あなた方を神に近づけようとして、自らは義なる方であるのに、不義なる人々のために、ひとたび罪のゆえに死なれた」。(第一ペテロ 3: 18)

「すなわち、私は雲の中に虹を置く、これが私たちの間の契約のしるしとなる。私が雲を地の上に起こすとき､虹は雲の中に現れる」。(創世記 9: 13、14)

「そして彼らは神を認めることを正しいとしなかったので、神は彼らを正しからぬ思いに渡し、なすべからざることをなすに任せられた。」(ローマ 1: 28)

お元気でお過ごしでしょうか。今月は「神の愛の約束」と題してイザヤ書 54 章から、神の揺るぐことのない愛の言葉を確認いたします。今年 2 月に「平安の契約」というお話をいたしました｡聖書の言葉は、神と人との間に与えられた契約です。信仰とはこの契約に基づいて生きることです。今日不動産の取引などをするときには実印を押します。朱肉を使いますが、本来これは自分の血を塗ることを意味しています。神様が私たちの罪を赦し､愛し､導いてくださる約束には、私たちの側の悔い改めと、信仰が求められます。しかしそこにキリストから流れる血潮の十字架印があるのです。

イザヤ書 53 章は「第 4 の主の僕の歌」と言われます。
それは約 600 年後に出現するイエス・キリストの生涯と十字架を預言しています。「その打たれた傷によってわれわれは癒されたのだ」(53: 5)とは､まことに深い意味を持っていると思います。人間は生を受けた時から肉体的病と戦っています。しかし、それ以上に魂の病、罪との戦いの中に苦しんでおります。

神の愛は、人間の罪を見過ごしにして赦すことができません。身代わりの死によってでしか私たちを受け入れることができないのです。もし今日も十字架のイエス・キリストを見上げるならば、満天の星の輝きの如く、あるいは、暖かな太陽を浴びるが如く、神の愛を受けることができます。

現代は急速に変化しています。過去 100 年の中で、これほど、科学技術や価値観や人間関係が変化した時代はありません。昔の人のように筋金入りの信仰者を見いだす事は非常に少なくなりました。しかし、私たちは聖書の約束に基づいた確かな信仰を守り通して､祈りましょう。「ただ疑わないで、信仰を持って願い求めなさい。疑う人は、風の吹くままに、揺れ動く、海の波に似ている。」(ヤコブ 1: 6)
皆様の上に神の祝福をお祈りしております。

＊9 月 18 日(月)大阪クリスチャンセンターにおける「喜びの歌を共に大阪集会」のご案内を再度申し上げます。関西方面にお集まりいただける方はまたとない機会ですのでぜひおいでください。ぜひ事務局に電話､ファックス､メールなどで登録をお願いいたします。

◇◆◇ ＣＦＩ会員投稿原稿　第 91 ◇◆◇

「信仰とは賭けである」

浅賀千栄子(東京都)

「人間は考える葦である」という名言を残したパスカルは、信仰についてこう書いています。

「信仰とは一つの賭けである。(中略)

どうしても選ばなければならないのなら、損害の少ない方はどちらか見てみよう。(中略)もし君が勝てば君は全てを得る。もし君が負けても君は何も損をしない。だから、ためらうことなく神はあるという側に賭けなさい」と。

これは 2004 年 8 月 21 日(土)の新聞記事の一節です。私は 2000 年 6 月 11 日（日）に洗礼を受けましたが、上記の新聞の記事が目に止まったとき、小田先生から受洗の前に、このパスカルの話になぞらえるお話をお聞きし、心を動かされたことを思い出し、ノートに記してありました。

私がどのようなきっかけで、心を開くことになったかということを思い出した事は大変幸いなことでした。

「義を追い求め、主を尋ね求めるものよ、私に聞け。あなた方の切り出された岩と、あなた方の掘り出された穴とを思いみよ。」(イザヤ 51: 1)

当時私は義姉の看病をして聖路加病院にたびたび行っておりました。ある日、小田先生が病室を訪問してくださったことがきっかけで、神様が私の心の扉を叩いてくださいました。義姉は日頃、「誰にも心に神様を宿す場所がある」と証していました。私は義姉の看病を通して、神様に近づき、用意されていた心に、神様がお住まいになってくださったのです。

天のお父様は、私のような小さなものに心を留めて、ここまで導いてくださいました。これまでを振り返りますと、社会生活の中では、会社経営や個人的な問題においても、難題が山積しておりました。しかし今、私にとりまして、これらの事は全て人生の Good　lesson であったと感謝できます。あの日、神様の愛とイエス様の救いに一生を賭けましたが、すべては良い方に導かれたと確信しています。ですから、心の平安と希望とを持って神様を高らかに賛美していきたいと願っています。ヘンデル作曲メサイアの合唱団に参加するようになり、格別の賛美の喜びが与えられました。そこには永遠の命が約束されています。ハレルヤ、ハレルヤ！

・・

当時、私がお話ししたと思われる、パスカル「パンセ」の「賭けの断章」について触れておきます。パスカルといえば「賭けの論理」の思想は有名です。このことを、浅賀姉が新聞で読まれたということは、大変深い摂理だと思います。

小田彰

(本文抜粋「パスカルの信仰」田辺保著教文館より)

その通りだ。だが賭けはしなければならない。勝手にどうでもできるということでは無いのだ。もう君は「舟を乗り出している」のだ。さぁ、どちらの側を取るつもりか。ちょっと見てみよう。どうしても選ばねばならないのなら、損害の少ない方はどちらかを見てみよう。君の失うかもしれないものは二つ、真実と幸福とである。賭けなければならないものも二つ、君の理性と君の意思、つまり君の知識と君の幸せとである。君の本性が避けようとしているものも二つ、誤りと悲惨さとである。どうしても選ばなければならないとしたら、どちらを捨てどちらを選び取ったとしても、君の理性が感じる痛みはそう大して変わらない。さぁ、これで一つの点が片付いた。だが、君の幸せはどうなる。

神は存在するという表の側をとって、その損失を比べ合わせてみよう。次の二つの場合を評価してみよう。もし君が勝てば、君は全てを得る。もし君が負けても、君は何も損をしない。だから、ためらうことなく神はあるという側にかけなさい。(p.243)

……………神を知るのは、最終的には「信仰による」ほかは無いのだが、せめても、信仰に入る入り口まで何とか、人間がギリギリ、自分の判断力を用いて達することができないのだろうか。ある意味では、人生で最重要な信仰に入るか、入らないかの決断についても、人間がその判断力を尽くして加わり得るギリギリのあり方として「賭け」だけが残されていたととらえることもできよう。(p.232)